様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０４１１９

研究課題名（和文）日本における難民の編入モードに関する定性的研究－インドシナ難民の事例から－

研究課題名（英文）Qualitative Research on Mode of Incorporation of Refugees in Japan

研究代表者
長谷部　美佳（Hasebe, Mika）

明治学院大学・教養教育センター・准教授

研究者番号：３０６２４１１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、インドシナ難民と呼ばれた人たちが、日本にどのように「統合」されてきたかを、主にライフストーリーを聞き取ることを通して明らかにしようとしてきた。当時者と支援者合わせて60名前後への聞き取りを実施した。当事者の中で安定的な生活を送っている、あるいは特に日本語でのコミュニケーションに不自由を感じない人たちの多くが、何らかの形で、「重要な他者」としての日本人と出会っていることが示唆されている。
支援者の多くは、1980年代から90年代にかけて、ボランタリズムの精神での支援を始めるのだが、その多くは「国際的」な活動への関心、あるいは海外経験をしていた人が多く含まれていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
インドシナ難民については、ほかの移民と比較して、これまでに十分に研究がなされてきたとは決して言えない。インドシナ難民を中心テーマとした学術研究の成果としての書籍は、荻野（2013）「ベトナム難民の定住化プロセス」、長谷部（2020）「結婚移民の語りを聞く」程度であり、博士論文で野上（2016）、中島（2020）などである。その意味では本研究成果は、学術的なインドシナ難民研究の進展に大きく貢献するものと自負する。また、1978年以降40年の定住の歩みのある集団の実情が、社会的に十分に理解されているとも言い難く、社会的な意味においても、彼らの実情を理解してもらう上で、大きく寄与していると考えられる

研究成果の概要（英文）：In this research, the researcher has tried to illustrate how the people who were called Indochinese refugees were "integrated" into Japan, by collecting their life stories.In thei process, the resarcher depends on the idea of "Mode of Integration" . In this idea,in the process of immigrants' integration, the attitudes and social environment of the host society, as well as the ethnic community have played a crucial role. And social systems and social capital in the host society are just as important as the human capital of the immigrants themselves.Based on this arguement, the researcher had conducted interviews with refugees themselves as well as the supporters putting the focus on what kind of social capital the refugees had.
Around 60 life stories, including refugees themselves as well as their supporters, the findings indicate that refugees whose lives looke stable have met some Japanese "important others" in their process of integration.

研究分野：社会学　移民研究

キーワード：インドシナ難民　移民の社会統合　エスニック・コミュニティ　ホスト社会と支援者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の開始当初、定住が開始されてからすでに 40 年近くが経過したインドシナ難民に関する包括的な研究というものはほとんど見当たらなかった。当時、日本と同時期にインドシナ難民を受け入れた米国やその他欧米諸国におけるインドシナ難民の研究は、就労、教育、社会関係資本の蓄積、市民権の取得などをある種の基準としてその度合いが論じられるなど、部厚い蓄積があった。翻って日本の移民難民研究において、本研究の目的は、日本に在住するインドシナ難民の社会統合の有り様を、当事者とその支援者など関係者へのオ ーラル・ヒストリーの聞き取りを通して考察するものである。移民・難民の社会統合についての研究は、欧米を 中心に研究が積み重ねられ、就労、教育、社会関係資本の蓄積、市民権の取得などをある種の基準として、その 度合いが論じられてきた。翻って日本の移民難民研究状況を振り返れば、国際結婚で日本にやってきた移住女性や、日系ブラジル人を中心とした日系人など、いくつかの移民集団に関する研究の蓄積はあったものの、インドシナ難民の社会統合の状態を包括的に明らかにしようとする研究は、非常に限定的であった。

２．研究の目的

このため、本研究ではインドシナ難民の社会統合状態を包括的に明らかにするため、実証的かつ定性的に難民の社会統合のあり方を分析することを企図した。特に本研究では、米国の社会学者 A.ポルテスらが提唱する「移民の編入様式」という考えに基づき、移民の社会状況を理解するためには、特に移民が移住する先のホスト社会の社会制度や態度、そして移民の同胞からなるエスニック・コミュニティの在り方を理解する必要があると考え、そのそれぞれにつき、以下の資料を収集することを通して明らかしようと企図した。①社会統合の状態についての理論枠組を構築すること、②難民当事者、および支援者の日本人へのオーラルヒストリーを収集すること、③歴史的資料を集めて受け入れにまつわる歴史的背景を明らかにすること、以上 3 点である。

３．研究の方法

上記、3 つの方法についてであるが、この中でも研究方法として最も重要視したのは、②の難民当事者と支援者の日本人へのオーラルヒストリーの収集である。日本にはインドシナ難民だけを対象とした公式な統計が事実上存在していないため、インドシナ難民やその支援者へのライフストーリーを集め、その語りを詳細に考察することを通して、実証的かつ定性的に難民の社会統合のあり方を分析することを企図している。

４．研究成果

主たる研究成果は、難民当事者、支援者含め約 60 名に対しライフストーリーの聞き取りを行って集めた一次資料の収集にある。一次資料の分析には、今後も十分に時間をかけることが必要になる。ただ概要としては、当事者の中で安定的な生活を送っている、あるいは特に日本語でのコミュニケーションに不自由を感じない人たちの多くが、何らかの形で、「重要な他者」としての日本人と出会っていることが示唆されていることがいえる。

また、研究期間中、収集したデータからいくつかの研究論文の発表と、学会発表を行った。

まずは 2017 年度第 90 回日本社会学会大会で「インドシナ難民：コミュニティとその資源―コミュニティ・メ ンバーの属性との関連で―」というタイトルで報告した。この報告では特に、インタビューや参与観察を通して、日本語に不自由しない第二世代の若者が、「友人、宗教、当事者団体」の 3 つのエスニック・コミュニティとどう関係したか、その在り方から考察した ②聞き取り調査の一部をもとに、2018 年度開催される World Congress of Sociology にて"Japanese Ability of Indo-Chinese Refugees and Their Social Networks with the Japanese Society" という学会において、インドシナ難民の一世世代の日本語習得について、日本との社会的関係の有無の影響を分析したものを文書配布行った。③2019 年度第 92 回日本社会学会大会で「インドシナ難民定住者にとってのエスニック・コミュニティとの関係性とその意義の変容」というタイトルで報告を行った。特に難民第一世代の滞日経験が長い人にとって、コミュニティとの関係性が減少することなく続くのかの報告を行った。④2021 年 3 月末にはハーベスト社から『結婚移民の語りを聞く―インドシナ難民家族の国際移動』というタイトルの単著を発行、博士論文を公刊した。⑤2021 年度第 94 回日本社会学会大会で「日本におけるカンボジア・コミュニティの形成とその役割の変容」というタイトルで報告を行った。こちらはカンボジア・コミュニティそのものの役割が、情報提供など定住初期に必要な資源の提供から、徐々に文化変容などに移っていることを報告した。⑥2021 年度には、学術雑誌『カンボジア難民の語る「エスニック・コミュニティ」と「日本社会」とのつながり』というタイトルの研究ノートを掲載した。こちらは難民本人のオーラルヒストリーの中で、日本人との関係がどのように語られてきたかを明らかにしたものである。⑦同じく 2021 年度には学術雑誌『PRIME』に「恒久的な難民政策につながらなかったインドシナ難民対策」というタイトルの研究ノートを発表、インドシナ難民が日本に入ってきたときの、市民運動や入管政策から、なぜインドシナ難民の受け入れが、「難民」政策につながらなかったかを考察した。⑧同じく 2021 年学術雑誌『カルチュール』において「多文化共生の源流としてのインドシナ難民」としたタイトルで論文を発表、主に支援者への聞き取りをもとに、インドシナ難民の支援に女性が多かったことに着目、当時のボランティア活動に関する意識などに触れ、サービス提供型だったインドシナ難民支援の在り方が、女性の活動参加を促し、それが「多文化共生」分野での支援活動につながったと論じた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 長谷部美佳	４．巻 6
２．論文標題 カンボジア難民の語る「エスニック・コミュニティ」と「日本社会」とのつながり	５．発行年 2021年
３．雑誌名 語りの地平	６．最初と最後の頁 145‐156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長谷部美佳	４．巻 45
２．論文標題 恒久的な難民政策につながらなかったインドシナ難民対策	５．発行年 2022年
３．雑誌名 PRIME	６．最初と最後の頁 95‐103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長谷部美佳	４．巻 16
２．論文標題 多文化共生の源流としてのインドシナ難民	５．発行年 2022年
３．雑誌名 カルチュール	６．最初と最後の頁 95‐104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 長谷部美佳
２．発表標題 日本におけるカンボジア・コミュニティの形成とその役割の変容
３．学会等名 第94回日本社会学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 長谷部美佳
２．発表標題 インドシナ難民定住者にとってのエスニック・コミュニティとの関係性とその意義の変容
３．学会等名 第92回日本社会学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 長谷部美佳
２．発表標題 インドシナ難民が語る日本、日本人が語るインドシナ難民
３．学会等名 ライフストーリー研究会第５回夏季研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mika Hasebe
２．発表標題 Japanese Ability of Inco-Chinese Refugees and Their Social Network with the Japanese Societyi
３．学会等名 International Sociological Association（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 長谷部美佳
２．発表標題 インドシナ難民：コミュニティとその資源―コミュニティ・メンバーの属性との関連で―
３．学会等名 第90回日本社会学会大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mika HASEBE
２．発表標題 Indo-Chinese Refugees and Their Social Networks with the Japanese Society
３．学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 長谷部美佳	４．発行年 2020年
２．出版社 ハーベスト者	５．総ページ数 227
３．書名 結婚移民の語りを聞くーインドシナ難民家族の国際移動とは	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関